

アルゼンチンと日本

吉田 真人

アメリカの経済学者サイモン・クズネッツ（1971年ノーベル経済学賞受賞）は世界の国は次の4種類に腑分け出来る、とジョークを飛ばした。即ち①発展した国、②未発展の国、③日本、④アルゼンチン、である。

③の日本は②から①へと発展した。一方④のアルゼンチンは、元々①であったが、20世紀以降の世界で唯一、先進国から脱落し未発展の国の仲間入りをした。

アルゼンチンは農産物の輸出で成長したが、工業化の波に乗り遅れ、急速に貿易赤字が膨らんだ。国民生活が豊かになったことで、高額年金を求める声が大きくなり、社会保障費が増大し、衰退につながった。今や、数年ごとに国家がデフォルトを引き起こしている。

1910年代には一人当たりGDPが世界10位以内と繁栄を誇り、都市整備も進んだ。ブエノスアイレスに地下鉄が開通したのは、ロンドンやパリ等に次ぐ1913年で、旧宗主国のスペインより早い。

アニメ「母をたずねて三千里」（1976年から日本で放映）は、イタリアのジエノヴァから、ブエノスアイレスに出稼ぎに行ったまま音信不通となった母を訪ねるために、9歳の少年マルコがアルゼンチンに渡って、様々な人に助けられながら旅するという物語だ。原作「クオーレ」は1886年の出版で、この時代のアルゼンチンは、ヨーロッパから人々が出稼ぎに行く先進国だったのである。

十年余前、南米旅行に行った。ブエノスアイレスは往事の栄華を思わせる堂々とした町並みではあるが、随所に苦境や衰退を覗わせる街でもあった。国会議事堂の真横の大きなビルが、長年使用されないまま朽ち果てつつあった。

また地下鉄には丸ノ内線の中古車両が走っていた。1927年に開通した東京銀座線のモデルはこの地下鉄だったので、何たる歴史の皮肉であろうか。

さて現下の日本。急増する貿易赤字と進む円安。膨張する社会福祉と財政赤字。もっと給付を！と叫ぶだけの政治勢力。これはアルゼンチンが辿った道でないことを祈る。



(2022年10月27日)